東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会のレガシーとして誕生した

JSPFA 日本ソフトパラフェンシング協会
Japan Soft Para-Fencing Association

【スローガン】

公式 HP はこちら⇒

つくる楽しみ、遊ぶ楽しみ、学ぶ楽しみを、あなたと一緒に。

ソフトパラフェンシングは、誰でも、いつでも、どこでも、いつまでも楽しめる新しいスポーツです。

【協会の使命（ミッション）】

- 復興五輪である東京 2020 オリ・パラ大会をレガシーとして後世に伝える。
- レガシーの一つであるソフトパラフェンシングを通じて、共生社会とＳＤＧｓを実現する。
- ソフトパラフェンシングを通じて、パラフェンシングの普及に貢献する。

【協会の将来像（ヴィジョン）】

- 一人でも多くの方に復興五輪である東京２０２０オリ・パラ大会を理解してもらう。
- ソフトパラフェンシングを通じて、障がいのある人もない人も、スポーツが得意な人も苦手な人も、子どもからお年寄りまで、皆が共に楽しめる豊かなスポーツライフと豊かな地域社会を実現する。
- ソフトパラフェンシングを通じて、パラリンピックにパラフェンシングで出場する選手を輩出する。

【協会の事業】

- ソフトパラフェンシングの普及・促進（公認審判員の育成、体験イベント等の開催）
- 日本パラフェンシングとの連携（主催大会等の支援活動）
- パラボランティア同窓会の開催（東京 2020 大会のレガシーの継承）
- その他（自治体・教育機関との連携、広報・出版活動等）

【役　員】

会　長：馬場宏輝（帝京平成大学）
理長：遠藤隆志（植草学園大学）
事務局長兼任理事：藤森孝幸（敬愛大学）
理　事：泉　美帆子（帝京平成大学）、鈴木恵（植草学園大学）
小枝亜耶乃（敬愛大学）、日置理子・廣瀬莉奈（帝京平成大学）
澤田佳穂・加茂春奈・逢坂幸那（千葉大学）
監　事：下永田修二（千葉大学）　　【2022 年 8 月 29 日設立】

◆お問合せ先：〒263-8588 千葉市稲毛区穴川 1-5-21　敬愛大学地域連携センター内
日本ソフトパラフェンシング協会事務局　info.jspfa@gmail.com

大学生ら 新競技考案

ソフトパラフェンシング 協会を設立

オリパラから1年 1

東京五輪・パラリンピックが開かれてから1年がたった。57年ぶりに東京で開かれたスポーツの祭典は、計8競技が行われた千葉県に何を残したのか。レガシー（遺産）と課題を探る。

スポンジ製の剣を片手で構え、いすに座り、対戦相手と向き合う。反対の手には、触れると点灯するライト。審判の「始め」の合図で剣を振り合い、相手のライトを先に光らせるとポイントが入る――。

競技名は「ソフトパラフェンシング」。東京パラリンピックの際、千葉市美浜区の幕張メッセが競技会場となった「車いすフェンシング」で競技ボランティアを務めた大学生らが考案した新競技だ。8月上旬、帝京平成大千葉キャンパス（市原市）で行われたオープンキャンパスでは、訪れた高校生らがこの競技を体験した。

車いすフェンシングの競技ボランティアには、帝京平成大と千葉大、敬愛大、植草学園大の県内4大学の学生約120人が参加した。同競技は、ピストと呼ばれる競技台に車いすを固定する作業があり、選手1人が試合を行うのに3人のボランティアを必要とする。車輪の固定位置やバランスを細かく指示する選手も多く、ボランティアには高いスキルが求められる。

「ソフトパラフェンシング」を実演する大学生ら（29日、千葉市若葉区の植草学園大で）

競技会場で行われたリハーサルで車いすを固定する競技ボランティア（帝京平成大提供）

経験 社会還元図る

学生たちは2018年末頃から大会に向け、準備を開始。日本車いすフェンシング協会から講師を招いて講習を開き、技術を習得した。コロナ禍で大会が延期され、参加予定だった学生が卒業してしまう事態にもなった。しかし、経験豊富な上級生を中心に本番を乗り切った。

千葉大4年の沢田佳穂さん(22)は「大会本番でピリピリしている選手たちに対して、どこまで踏み込んで手伝いをしていいのか、距離感を測るのが難しかった」と振り返る。それでも、選手から「ありがとう」と母国語や日本語で伝えられた時に大きな喜びを感じた。

祭典で得た経験を社会に還元したい。そんな思いで学生が作り上げたのが、ソフトパラフェンシングだ。「車いすの代わりにいすに座って簡易的に競技をできないか」というアイデアを基に、4大学からの実行委員が中心となってルール作りを進めた。

100円ショップなどで手に入る身近な道具にこだわり、老若男女、健常者も障害者も誰もが楽しめるようにハンデも考えた。昨年の東京パラで車いすフェンシング競技が終了した日からちょうど1年の節目となった29日、ボランティアを務めた学生たちは、千葉市若葉区の植草学園大に集まり「日本ソフトパラフェンシング協会」を設立した。

大会が無観客で開催されたことから、競技ボランティアは会場の空気を肌で感じた貴重な存在だ。帝京平成大4年の渡辺拓海さん(22)は「国を懸けて本気で戦う選手たちの姿に圧倒された」という。大会を経て、「パラスポーツを広める活動をしたい」と決意し、スポーツイベントを手がける会社へ就職する。

学生たちは今後、小学校や高齢者施設に出向き、競技を広めることを計画している。実行委員を務める同大3年、日置理子さん(20)は「ボランティアとして活動して、人の輪が広げられたことが財産になった。誰でも楽しめる競技を考えたので、さらに人の輪を広げていけたら」と意気込む。

学生たちを指導した同大の馬場宏輝教授(スポーツ科学)は、学生たちの成長に目を細める。「レガシーは何が残るかと期待するものではなく、自分たちから作り出すものなのかもしれない」

2022年8月30日（火）　読売新聞朝刊